

報道活動部門

ギャラクシー大賞

RSK 地域スペシャル メッセージ

山陽放送



民放地上波の報道ドキュメンタリー枠は、たいていが深夜か早朝。子どもにも見せたい良質の番組が放送されていても、よほど関心を持って見る人以外には、ほとんど届かないのが現状です。

山陽放送は、夜8時56分から9時53分のゴールデンタイムに報道ドキュメンタリー枠を設定することで、このような業界の「常識」に挑戦しました。放送は2012年4月のスタートから今年3月までで、既に130回に達しました。「地域の今」を伝えるこの番組が放送したのは、美しい棚田を復活させようとする取り組み

若者たち、野生動物による食害、「幻の和牛」再生に取り組む老人といった過疎と農業の問題から、子どもの貧困、買い物難民、性同一性障害、特殊詐欺、医療、教育、災害、戦争、芸術、スポーツと実に幅広いものです。今年、クローズアップされた保育所問題も、既に昨年11月に放送しています。

ニュースだけでは伝え切れないエリアの現状を深く掘り下げ、子どもから老人まで幅広い視聴者層に見てもらえる時間帯で放送する。このような局の姿勢に対して称賛が集まりました。

STAFF

プロデューサー：桑田 茂

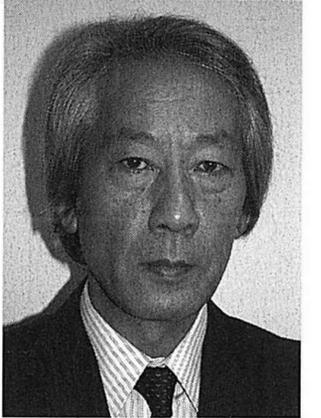
ディレクター：山下晴海、竹澤徳昭、古川豪太、武田博志

撮影：中村新一、横田康成

「報道活動部門」

地域に密着、息の長い報道活動

報道活動部門委員長 鈴木嘉一



応募総数は上期11本、下期19本の

計30本で、前年度に続き30本台に達した。2015年は戦後70年の年だったため、戦争関連のシリーズや企画が12本に上った。次に多かったのは、5年を迎えた東日本大震災や防災関連の6本だった。

上期4本、下期6本に絞られた入賞候補作の中から、山陽放送(岡山市)の「RSK地域スペシャルメッセージ」が、戦後70年や震災関連を抑えて大賞に決まった。

水曜夜9時台で放送中の「メッセージ」は、1時間の報道系ドキュメンタリー番組だ。12年4月から始めて、今春、130回を超えた。ディレクターとカメラマンら6人が専従で、買い物難民、老々介護、子どももの貧困、特殊詐欺など地域のさまざまな問題を掘り下げる。備前焼や瀬戸内国際芸術祭といった話題も取り上げ、日本民間放送連盟賞などの受賞作やTBSの「報道特集」で放

送される題材も生まれている。

民放キー局でも08年、ゴールデンタイムでドキュメンタリー番組を復活させる動きがあった。TBSが「水曜ノンフィクション」を、テレビ朝日が「報道発 ドキュメンタリー宣言」を始めたが、長続きしなかった。それだけに、見やすい時間帯でドキュメンタリーを定着させようとする地方局の志と意気込み、硬軟取り混ぜた多彩なラインアップは、多くの賞賛を集めた。

保育料の値上げ問題をめぐる北海道テレビ放送の報道は、優秀賞に選ばれた。政府が少子化対策を重要課題に掲げる中、札幌市では昨秋、子どもが多い家庭ほど保育料が上がった。国の新たな制度によるもので、月に3万円アップした家庭もある。「少子化対策に逆行」との疑問から出発した一連の報道は、札幌市を動かし、政令指定都市の市長会が国に制度の見直しと財政措置を求める決

議につながる。市民の切実な声に耳を傾けて行政側の矛盾を追及し、優れたキャンペーンとなった。

もう一つの優秀賞は、琉球放送の「戦後70年の地平から」シリーズだ。夕方のニュース番組の通年企画として、座間味島での集団自決から始まり、悲惨な沖縄戦の経過を時系列でたどる。高齢者の生々しい証言などから、沖縄の悲劇はまだまだ語りつくされていないと痛感させられた。ただ過去を振り返るのではなく、米軍基地を抱える今日の沖縄を見据える問題意識と報道姿勢が光る。

札幌テレビ放送の「終わらなかつた戦争〜70年目の証言〜」シリーズ(選奨)も、「北海道の局ならではの視点で戦後70年に取り組んだ」と評価された。北海道周辺では1945年8月15日の玉音放送の後も、戦争が続いた。ソ連が樺太に侵攻し、電話交換手9人が服毒自殺する悲劇も起きた。択捉島などの元島民から貴

重な証言を得るとともに、シベリア抑留の実相にも迫った。

大阪市東住吉区の「放火殺人」事件をめぐって、テレビ朝日が10年間続けてきた報道活動(選奨)は、独自の調査報道のお手本とも言える。95年、少女が焼死し、母親と内縁の夫が殺人容疑などで逮捕された。最高裁で無期懲役判決が確定したが、取材班は燃焼実験や専門家へのインタビューなどで「自白通りの犯行は不可能」と、疑問を投げかけてきた。再審の扉は開かれ、検察側が有罪の主張を断念したため、8月にも無罪判決が出る見通しだ。

原発事故の影響を受けた福島県南相馬市小高区での「農地復興」を追い続ける福島放送の報道(選奨)は、2013年の優秀賞受賞作の続編。避難区域の小高区では、コメ作りから菜種油の原料となる菜の花などの作物に転換し、農業の再建をめざしている。苦闘する農家に密着取材し、地域の希望を探る鎌田侑樹記者の粘り強い姿勢が再び評価された。受賞作のうち、民放ローカル局が5作を占めた。いずれも地域に密着し、息の長い報道活動だった。